

港のたより～「函館港」

古くは中世から港として利用され、江戸時代には北前船の寄港地として、また明治時代には北洋漁業の本拠地として繁栄した「函館港」は、横浜、長崎と共に今年開港 150 周年を迎えました。そしてこの函館港で大正 8 年（1919 年）から 3 代に亘り繋離船業、通船業を営まれてきた共同通船㈱さんが創業 90 周年を迎えられました。

同社小林敏夫社長とご子息の小林大輔営業部長に函館港内を同社の綱取り兼通船ボート千鳥丸（19ト）で案内していただきました。



【共同通船所有・千鳥丸】



【函館港内】

函館港は北海道の玄関口だけに、各種産業が湾内周囲に集約された港で産業別に水産関連、物流・生産、交流拠点、そして緑地レクリエーションの 4 つのゾーンに分かれています。半円周（巴状）の形をしている為、対岸に向かうには陸路で 1 時間近くかかりますが、海路を利用すると 30 分に短縮されることもあり、現在でも通船の利用が盛んな港でもあります。



【セメント工場から海上に伸びる栈橋】

函館湾の海域は全体に浅瀬であり、また辺りはホッキ貝の漁場になっており、水深の確保や漁業権が絡み、遥か「沖合い」に海上荷役基地が造られました。ライン上は 5 人乗りのトラックが通っていますが、船舶関係者は陸からの訪船は出来なくなっているため通船を利用されます。また右上の写真は北海道ガス専用ターミナルで天然ガスの揚荷を終え、離棧した 1,000 ト級の内航 LNG 船…積荷の君津港は 24 時間以上の投錨が出来ないため時間調整しているところです。このような場合でも船食や船舶備品などの積み込みで通船が大いに活躍しています。

左の写真はセメント積荷役中の 32,000 トの本船、工場から栈橋まで 2,000m のパイプラインが伸びています。



【君津港向け待機中の内航 LNG 船】



また同社小林社長は 2004 年からクルーズ事業を始められ、現在「金森ベイクルーズ」（写真左）として港内一周を 15 分で遊覧する高速クルーズを展開され、現在函館港の観光スポットの一つとなっています。

200.9.18. 渡辺、三木